

P94-460

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平 7 - 3 3 0 5 7 5

(43) 公開日 平成 7 年 (1995) 12 月 19 日

(51) Int. Cl. <sup>8</sup>

A61K 7/48

7/00

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

U  
L

審査請求 未請求 請求項の数 11 F D (全 8 頁)

(21) 出願番号 特願平 6 - 1 5 2 9 0 1

(22) 出願日 平成 6 年 (1994) 6 月 10 日

(71) 出願人 0 0 0 0 0 9 1 8

花王株式会社

東京都中央区日本橋茅場町 1 丁目 1 4 番 1  
0 号

(72) 発明者 石田 耕一

千葉県船橋市習志野台 1 - 2 1 - 2 5 - 5  
0 7

(72) 発明者 植村 智浩

千葉県千葉市花見川区朝日ヶ丘町 1 - 3  
花王寮

(74) 代理人 井理士 田治米 登 (外 1 名)

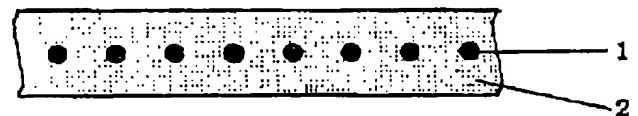
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 シート状バック

(57) 【要約】

【目的】 ビールオフタイプのシート状バックに関し、皮膚に被膜形成性化粧料を適用後、被膜形成が完了するまでの時間を短縮し、剥離時の剥がれ残りを解消する。

【構成】 ビールオフタイプのバックを、被膜形成性化粧料層 2 と透湿性基材 1 とからシート状に形成する。透湿性基材 1 は、その内部全体に被膜形成性化粧料を含浸させる。



## 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 被膜形成性化粧品と透湿性基材からなり、該透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧品が含まれていることを特徴とするシート状パック。

【請求項 2】 透湿性基材の空孔が、連続孔である請求項 1 記載のシート状パック。

【請求項 3】 透湿性基材が、疎水性材料から形成されている請求項 1 又は 2 記載のシート状パック。

【請求項 4】 透湿性基材が、空隙率 1 ~ 99 % の織物、編み物又は不織布からなる請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載のシート状パック。

【請求項 5】 透湿性基材が、空隙率 1 ~ 99 % のフィルムからなる請求項 1 ~ 3 のいずれかに記載のシート状パック。

【請求項 6】 被膜形成性化粧品が、保湿用化粧品、油脂吸収用化粧品又は角栓除去用化粧品からなる請求項 1 ~ 5 のいずれかに記載のシート状パック。

【請求項 7】 角栓除去用化粧品が、カルボキシル基、スルホン酸残基、硫酸残基、リン酸残基、硝酸残基、アミノ基及びアンモニウム基から選ばれる塩生成基を有する高分子化合物を含有する請求項 6 記載のシート状パック。

【請求項 8】 被膜形成性化粧品が乾燥状態であり、使用時に水分が供給される請求項 1 ~ 7 のいずれかに記載のシート状パック。

【請求項 9】 被膜形成性化粧品がペースト状である請求項 1 ~ 7 のいずれかに記載のシート状パック。

【請求項 10】 片面に剥離シートが積層されている請求項 8 記載のシート状パック。

【請求項 11】 両面に剥離シートが積層されている請求項 9 記載のシート状パック。

## 【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】 本発明は、ピールオフタイプのシート状パックに関する。

【0002】

【従来の技術】 ピールオフタイプのパックは、被膜形成性化粧品を皮膚表面に適用し、一定時間放置して被膜が形成された後、その被膜を皮膚から剥がすタイプの化粧品である。このピールオフタイプのパックは、そこに使用されている化粧料の構成成分にもよるが、一般に適用時に皮膚の角質層に水分、保湿成分などを与え、皮膚からの油脂を吸収する。また、被膜形成により皮膚に適度な緊張を与え、血行をよくする。さらに、剥離時には皮膚の汚垢や角栓などを取り去る。このため、ピールオフタイプのパックは、高いエモリエント効果と清浄効果とを得るために重要なものとなっている。

【0003】 従来、ピールオフタイプのパックの製品形態としては、ゼリー状、ペースト状及び粉末状のものが知られている。このうちゼリー状及びペースト状のもの

は、それをそのまま皮膚に塗布し、被膜形成後に剥離するものである。また、粉末状のものは予め水等の液体を加えて液状とし、それを皮膚に塗布し、被膜が形成された後に剥離するものである。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】 しかしながら、従来のピールオフタイプのパックはいずれの形態のものも、通常、そのパックを構成する化粧料を指で皮膚へ塗布するため、塗布時に指に不用の化粧料が付着し、化粧料が無駄になると共に指が汚れるという問題点があり、また皮膚表面に均一に塗布することもできないという問題点があった。

【0005】 また、皮膚に適用後、被膜形成が完了するまでの放置時間が長い場合、パックの使用が面倒なものとなるという問題点もあった。

【0006】 さらに、通常の使用量では形成される被膜の膜強度が十分でないため、剥離時にちぎれ、皮膚表面に剥がれ残りが生じるという問題点もあった。剥がれ残りが生じないようにするためには、塗布量を多くして被膜を厚く形成することが有効であるが、この場合には塗布後被膜形成が完了するまでに要する時間がさらに長くなるという問題点があった。

【0007】 このような問題に対して、近年、種々のシート状パックが提案されている。例えば、ポリアクリル酸類と架橋剤からなる架橋型含水ゲルを不織布上に塗布したシート状パック（特開昭 58 - 180408 号公報）、アルギン酸、水溶性高分子化合物及び架橋剤を必須成分とするシート状含水パック（特開平 2 - 145505 号公報）、最上面を剥離シートで保護した複数層の多層型シートであり、各層にそれぞれ異なる美容成分を含有させ、顔面被覆マスクシートとしたもの（特開平 6 - 48917 号公報）等の水溶性高分子と水を使用した含水シート状パック剤が提案されている。また、アスコルビン酸類の薬用もしくは美肌成分を配合した水溶性高分子を主剤とする乾燥性膜状化粧品（特開昭 58 - 216109 号公報）、フィルム状物の片面にポリアクリル酸ソーダなどの糊料の乾燥薄層あるいは該糊料の微粉末を分散させた層を設けた美容パック剤（特開昭 60 - 165902 号公報）、水と非水溶媒に可溶性又は膨潤性を有する高分子と、非水溶媒のみに可溶性又は膨潤性を有する高分子とを必須とするシート状パック剤（特開平 3 - 294213 号公報）、ポリビニルアルコールとその他の高分子と多価アルコールを配合したシート状パック化粧品（特開平 5 - 194180 号公報）、アルギン酸ナトリウム及び多価アルコールを含有し、含水率を 25 重量%以下としたフィルム状パック剤（特開平 6 - 65048 号公報）等の水溶性高分子と水を主剤としたペースト状被膜形成性化粧料を薄膜化し乾燥状態にした乾燥シート状パック剤も提案されている。この乾燥シート状パック剤は、使用時に水又は化粧水で加湿して使用

される。

【0008】これらのシート状バック剤は、従来のバック剤に比較すると手軽に使用することができる。しかしながら、被膜形成完了までの放置時間や剥離時のちぎれ、皮膚表面への剥がれ残りという点では、なお満足できるものではなかった。

【0009】本発明は以上のような従来技術の問題を解決しようとするものであり、短時間に被膜形成が完了し、かつ剥離時にちぎれず、剥がれ残りが生じないピールオフタイプのバックを提供することを目的としている。

【0010】

【課題を解決するための手段】本発明者らは、ピールオフタイプのバックの構成材料として、被膜形成性化粧料の他に透湿性基材も使用し、この透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料を含浸させ、透湿性基材と皮膚形成性化粧料とを一体化すると皮膚上に形成される被膜の膜強度を大きく向上させることができ、それにより被膜形成性化粧料の使用量を少なくしても剥離時に剥がれ残りが生じないようになり、また被膜形成性化粧料の使用量を少なくすることにより被膜形成が完了するまでの放置時間も短縮させられることを見出し、本発明を完成させるに至った。

【0011】即ち、被膜形成性化粧料と透湿性基材からなり、該透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料が含まれていることを特徴とするシート状バックを提供する。

【0012】以下、本発明を詳細に説明する。

【0013】本発明のバックは、被膜形成性化粧料の他に透湿性基材を使用し、この透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料が含まれていること、即ち、透湿性基材の表面から中心部に至る内部全体に皮膚形成性化粧料が含まれていることを特徴としている。ここで被膜形成性化粧料と透湿性基材との位置関係は、透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料が含まれている限り特に制限はなく、図1に示すように透湿性基材1が被膜形成性化粧料層2の中央部に埋め込まれていてもよく、図2に示すように透湿性基材上1に被膜形成性化粧料層2の表層に埋め込まれていてもよい。これに対して、従来の不織布等を基材としたシート状バックにみられるように、図4に示すように、単に被膜形成性化粧料層2上に透湿性基材1が積層しているだけで、透湿性基材1の表層には皮膚形成性化粧料が含まれているが、一方の表面から他方の表面に至る内部全体には被膜形成性化粧料が含まれていない状態は含まない。

【0014】本発明に使用する被膜形成性化粧料そのものとしては、従来よりピールオフタイプのバックに使用されている種々の被膜形成性化粧料を使用することができ、その形態は既に十分な水分を含んだペースト状でもよく、あるいは当初は乾燥状態であって使用時に水分を

供給して使用するようなものでもよい。

【0015】被膜形成性化粧料中に含有させることができる被膜形成剤としては、例えば、ポリビニルアルコール、ポリビニルピロリドン、ポリ酢酸ビニルエマルジョン、カルボキシメチルセルロース等をあげることができる。また、増粘剤としては、ペクチン、ゼラチン、キサンタンガム、カラギーナン、アルギン酸ナトリウム、プルラン、メチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、カルボキシビニルポリマー等をあげることができる。

【0016】また、被膜形成性化粧料は、保湿用化粧料、皮脂吸収用化粧料、角栓除去用化粧料等のいずれの用途の化粧料として構成してもよく、各用途に応じた成分を含有することができる。例えば、保湿用化粧料とする場合には、被膜形成性化粧料中に保湿剤として、エチレングリコール、ジエチレングリコール、トリエチレングリコール、その他ポリエチレングリコール類、プロピレングリコール、ジプロピレングリコール、その他ポリプロピレングリコール類、1, 3-ブチレングリコール、1, 4-ブチレングリコール等のブチレングリコール類、グリセリン、ジグリセリン、その他ポリグリセリン類、ソルビトール、マンニトール、キシリトール、マルチトール等の糖アルコール類、ガラクトース、グルコース、フルクトース等の単糖類、マルトース、ラクトース等の多糖類等を含有させることができる。また、油分（エモリエント成分）として、流動パラフィン、スクワラン、固形パラフィン等の炭化水素、オリーブ油、ホホバ油、月見草油、ヤシ油、牛油等の天然油、イソプロピルミリステート、セチルイソオクタノエート、ジカプリン酸ネオペンチルグリコール等のエステル類、メチルポリシロキサン、メチルポリシクロシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン等のシリコン油、イソステアリン酸、オレイン酸等の高級脂肪酸等を含有させることができる。

【0017】また、角栓除去用化粧料とする場合には、特に膜強度の高い被膜を形成し、皮膚中の角栓を被膜に取り込み、剥離除去できるように、被膜剤として、特開平5-97627号公報の特許請求の範囲に記載されているような、アニオン性、カチオン性あるいは両イオン性の塩生成基、より具体的にはカルボキシル基、スルホン酸残基、硫酸残基、リン酸残基、硝酸残基、アミノ基、アンモニウム基等の塩生成基を有する高分子化合物を使用することが好ましい。

【0018】この他、いずれの用途においても、本発明において被膜形成性化粧料には、化粧料に通常配合される成分、例えば、ビタミンC、プラセンタエキス等の美白成分、グリチルリチン酸塩等の消炎成分、色素、顔料、界面活性剤、防腐剤、殺菌剤等を含有させることができる。

【0019】本発明において

のような被膜形成性化粧料の乾燥、被膜形成作用を妨げないように透湿性のものである限り、種々の布やフィルムを使用することができるが、透湿性基材の内部全体に皮膜形成性化粧料が含浸するように連続空孔を有する基材を使用することが好ましい。

【0020】透湿性基材の素材については特に制限はない。例えば、透湿性基材として布を使用する場合、その素材としては、綿、麻、羊毛等の天然繊維、レーヨン、アセテート等のセルロース系繊維、ナイロン、ビニロン、ビニリデン、ポリ塩化ビニル、アクリル、ポリエステル、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリウレタン等の合成繊維、その他無機繊維等を使用することができる。なかでも、被膜形成に要する時間を短縮する点から、ナイロン、ポリエステル、ポリエチレン、ポリプロピレンなどの疎水性繊維が好ましい。

【0021】これらの繊維の繊維径に関しては、数 $\mu\text{m}$ ～200 $\mu\text{m}$ 程度のものを好ましく使用することができる。また、細い繊維を撚ったフィラメント糸や紡績糸が柔軟性に優れているので好ましい。

【0022】このような繊維からなる布は、織物、編み物、不織布のいずれの形態であってもよい。

【0023】基材とする布の透湿性の程度はその空隙率に応じて定まるが、この空隙率が低すぎると被膜形成性化粧料の乾燥速度が遅くなる傾向がある。また、シート状バックの製造時、特に、被膜形成性化粧料中に布を含浸させる時に空気が混入する恐れも生じる。反対に空隙率が高すぎると、膜強度の向上作用が低下する傾向がある。また、シート状バックを皮膚から剥がすときに被膜形成性化粧料が皮膚に残りやすくなる。従って、空隙率を次式で表す場合に、空隙率は1～99%とすることが好ましく、20～99%がより好ましい。

【0024】

$$[\text{数1}] \text{空隙率} = (\rho - \rho') / \rho \times 100$$

(式中、 $\rho$  : 透湿性基材の比重  
 $\rho'$  : 透湿性基材の見かけの比重)

布の厚さに関しては、薄すぎると膜強度の向上作用が低下し、厚すぎると被膜形成性化粧料の塗工量が多くなり、シート状バックが当該貼付部位の外形状になじみにくくなる。したがって、厚さ10～2000 $\mu$ が好ましく、50～500 $\mu$ がより好ましい。

【0025】また、透湿性基材とする布としては、シート状バックを皮膚へ貼着するときに当該貼着部位の外形状になじむように、ある程度の伸縮性を有するものが好ましい。ただし、伸縮性が大きすぎると膜強度の向上作用が低下し、剥離性が低下するので、伸び率2倍以下程度のものが好ましい。なお、この伸縮性は繊維素材によるものでもよく、繊維素材自体の伸縮性ではなく、織物、編み物、不織布等に特有の変形性によるものでもよい。また、この伸縮性は、基材の全方向についての等方的伸縮でもよく、一方向に伸縮が大きい異方性伸縮でも

よい。

【0026】透湿性基材としてフィルムを使用する場合にも、フィルムの素材について特に制限はない。例えば、ポリエチレン、ポリプロピレン、ポリブチレン、ポリアセテート、ポリブタジエン、アイオノマー、ポリアミド、ポリ塩化ビニリデン、エチレン酢酸ビニルコポリマー、ポリ塩化ビニル、ポリエステル等のプラスチックフィルムを使用することができる。この他、紙類、セロファン等も使用することができる。なかでも、使用時の被膜形成に要する時間を短縮する点から、疎水性のプラスチックフィルムを使用することが好ましい。

【0027】フィルムの空隙率に関しては、布と同様に1～99%とすることが好ましく、20～99%がより好ましい。

【0028】また、フィルムの厚さに関しては、薄すぎると膜強度が低下し、厚すぎると当該貼付部位の外形状へなじみにくくなる。したがって、厚さ数 $\mu$ ～200 $\mu$ が好ましく、8～100 $\mu$ がより好ましい。

【0029】本発明のバックは、以上のような被膜形成性化粧料と透湿性基材とからなるが、さらに必要に応じて、使用時に剥離除去する剥離シートを表面に積層しておくことができる。例えば、被膜形成性化粧料を乾燥状態としておく場合に、一方の面に剥離シートを設け、バックの使用時に水分を供給するときの取扱性を向上させる。また被膜形成性化粧料をペースト状としておく場合には、シート状バックの両面に剥離シートを設け、使用時までの乾燥を防止し、またその取扱性を向上させる。このような離型シートとしては、ポリエステル、ポリプロピレン、ポリエチレン、ナイロン等を使用することができる。

【0030】また、本発明のバックは、外形状について特に制限はなく、所定の幅のシート状とし、皮膚への貼着時に適宜カットして使用するようにしてもよい。また、予め、顔全体を覆う全顔バックに適した形状にカットしておいてもよく、あるいはまた、額、頬、鼻等の部分バックに適する形状にカットしておいてもよい。例えば、図3(a)に示すような略三角形に形成しておくことにより、図3(b)に示すように、鼻の部分バックを簡便に行えるようになる。

【0031】本発明のバック製造方法としては、例えば、まず被膜形成性化粧料の構成成分を均一に攪拌し、水を加え、粘度を調整し、被膜形成性化粧料の液状物を得る。この場合、水の比率は10～95重量%となるようにすることが好ましい。次にこの液状物を、アプリケーションを用いて、剥離シート上に均一に展延塗布し、その上に透湿性基材を重ね、透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料を含浸させる。この場合、皮膜形成性化粧料を透湿性基材の表層だけでなく内部全体に含浸させる方法としては、例えば、剥離シート上に塗布した皮膜形成性化粧料の上に透湿性基材を重ねた後、十分に含浸時間

をとるようにすればよい。あるいは、剥離シート上の皮膜形成性化粧料の上に重ねた透湿性基材が、剥離シート側に押し付けられるようにローラーによって加圧してもよい。

【0032】次に、本発明のシート状バックを、被膜形成性化粧料がペースト状態のペーストタイプとする場合には、水分量を調整した後、さらに上面に剥離シートを積層し、所定形状に切断する。そして、使用時まで水分が揮発しないように密封保存する。一方、シート状バックを被膜形成性化粧料が乾燥状態のドライタイプとする場合には、乾燥させた後、所定形状に切断する。乾燥は、室温あるいは加温下で数時間放置することにより行う。このようにして得られるシート状バックは、ペーストタイプの場合、通常、含水量30～80重量%、シート厚50～2000 $\mu\text{m}$ となる。また、ドライタイプの場合、通常、含水量0.1～30重量%、シート厚10～1000 $\mu\text{m}$ となる。

【0033】本発明のバックの使用方法としては、本発明のバックのうち被膜形成性化粧料がペースト状態のものは、そのまま、その被膜形成性化粧料の面を皮膚に貼着し、被膜形成後に皮膚から引き剥がせばよい。また、本発明のバックのうち被膜形成性化粧料が乾燥状態のものは、まず被膜形成性化粧料の面あるいは貼付部位に水、化粧水等を供給し、その後ペースト状態のものと同様に皮膚に貼着し、被膜形成後に皮膚から引き剥がせばよい。

【0034】

【作用】本発明のバックは、被膜形成性化粧料が透湿性基材の内部全体に含浸した状態でシート状に形成されている。このため、本発明のバックを皮膚に適用後、皮膚上で形成される被膜は、透湿性基材と一体になったものとして形成される。したがって、被膜形成性化粧料のみに基づく被膜に比べて著しく膜強度が向上したものとなる。よって、被膜形成性化粧料の厚さ、単位面積当たり使用量を少なくしても、剥離時に剥がれ残りが生じないような十分に高い膜強度を得ることが可能となる。また、これにより、被膜形成の完了までに要する放置時間も短縮することが可能となる。

【0035】

【実施例】以下、本発明を実施例に基づいて具体的に説明する。

【0036】実施例1

まず、ポリ塩化メタクリロイルオキシエチルトリメチルアンモニウム10.0%、ポリビニルアルコール5.0%、グリセリン5.0%、エタノール10.0%、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油0.2%、メチルパラベン0.1%、精製水69.7%を混合し、攪拌機を用いて常温にて溶解させ、減圧脱気して角栓除去用被膜形成性化粧料溶液を調製した。この被膜形成性化粧料溶液を表面をコロナ放電処理したポリエステルフィルムからなる

剥離シート上に約500 $\mu\text{m}$ になるように均一に流延し、直後に上からナイロン素材の12デニール、5フィラメントの繊維からなる空隙率71%、厚さ85 $\mu\text{m}$ の編み物を透湿性基材として積層し、この積層物をローラーを通して引っ張ることにより、透湿性基材が剥離シート側に押し付けられるようにして透湿性基材の内部全体に被膜形成性化粧料溶液を含浸させた。次いで、70℃の熱風乾燥炉を通し、水分を蒸発させた。これにより、図2に示したように透湿性基材が被膜形成性化粧料層の表層（剥離シートと反対側）に埋め込まれているシート状バック（含水量約15%、厚さ300 $\mu\text{m}$ ）を得、さらにこれを鼻の形にカットした。

【0037】（評価）得られたシート状バックをパネラーによる使用テストに供した。この場合、シート状バックの使用方法としては、鼻の形にカットしたシート状バックの貼付面にまず化粧水を適量塗布し、ついで鼻に貼付け、被膜形成完了後バックを剥離した。そして、使い易さ、密着性、乾燥性、緊張感、剥がし易さ、膜の強度、剥がれ残り、角栓除去効果、肌のつるつる感について、各項目を◎、○、△、×の4段階に評価した。この結果を表1に示す。

【0038】実施例2

透湿性基材として、ナイロン素材の直径65 $\mu\text{m}$ の単繊維からなる空隙率77%、厚さ65 $\mu\text{m}$ の織物（ナイロン網）を使用する以外は実施例1と同様にしてシート状バック（厚さ300 $\mu\text{m}$ ）を得、これを評価した。この結果を表1に示す。

【0039】実施例3

実施例1と同様に角栓除去用被膜形成性化粧料溶液を調製し、これを剥離シートに流延し、その上に透湿性基材を重ね、水分量を30～40%とした後、上面をポリプロピレンフィルムで覆い、水分の蒸発を防止した。これにより、図1に示したように透湿性基材が被膜形成性化粧料層の中央部に埋め込まれているシート状バック（厚さ400 $\mu\text{m}$ ）を得、これを評価した。この結果を表1に示す。なおこの場合のシート状バックの使用方法としては、使用時にポリエステルフィルムを剥離した後、そのまま皮膚に貼付し、その後ポリプロピレンフィルムを剥離し、被膜形成が完了するまで放置した。

【0040】比較例1

実施例1と同様に角栓除去用被膜形成性化粧料溶液を調製し、これを剥離シートに流延し（厚さ約500 $\mu\text{m}$ ）、70℃の熱風乾燥炉を通して水分量を約20%に調整した後、透湿性基材を積層し、さらに70℃の熱風乾燥炉を通して水分量約15%に乾燥させた。これにより、図4に示したように、被膜形成性化粧料層と透湿性基材とが、透湿性基材中に被膜形成性化粧料が実質的に含浸することなく積層しているシート状バック（厚さ350 $\mu\text{m}$ ）を得た。そして、このシート状バックを実施例1と同様に評価した。この結果を表1に示す。

## 【0041】比較例2

透湿性基材を使用しない以外は実施例1と同様にシート状バックを作製し、これを評価した。この結果を表1に示す。

## 【0042】比較例3

実施例1と同様の被膜形成性化粧料を指で塗布量約0.01g/cm<sup>2</sup>で塗布し、この使用感を評価した。この結果を表1に示す。

## 【0043】

## 【表1】

被膜形成性化粧料 の配合(重量%)	実施例			比較例		
	1	2	3	1	2	3
ポリビニルアルコール	5.0	←	←	←	←	←
ポリ塩化ナトリウム						
トリメチルアミン	10.0	←	←	←	←	←
ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油	0.2	←	←	←	←	←
グリセリン	5.0	←	←	←	←	←
エタノール	10.0	←	←	←	←	←
メチルパラベン	0.1	←	←	←	←	←
香料	微量	←	←	←	←	←
精製水	69.7	←	←	←	←	←
透湿性基材	有	←	←	←	無	無
構造	図2	図2	図1	図4		
厚さ(μm)	300	300	400	350	220	
剥離シート	片面	片面	両面	片面	片面	無
水分量(%)	15	15	30~40	15	15	69.7
評価						
使い易さ	◎	◎	◎	◎	△	×
密着性	◎	◎	◎	◎	◎	◎
乾燥性	◎	◎	○	◎	◎	×
緊張感	◎~○	◎~○	◎	◎~○	◎~○	◎
剥がし易さ	◎	◎	◎	△	△	×
膜の強度	◎	◎	◎	△	×	×
剥がれ残り	◎	◎	◎	△	×	×
角栓除去効果	◎	◎	◎	△	△	○
肌のつるつる感	◎	◎	◎	○	○	◎

## 実施例4

被膜形成性化粧料の組成を、ポリビニルアルコール8.0%、スクワラン5.0%、ジプロピレングリコール5.0%、グリセリン5.0%、エタノール10.0%、ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油0.2%、メチルパラベン0.1%、精製水66.7%とする以外は実施例1と同様にシート状バック(厚さ280μm)を作製し、さらにこれを顔のTゾーン及びUゾーンの形状にカットした。

【0044】得られたシート状バックを、実施例1と同様に、使い易さ、密着性、乾燥性、緊張感、剥がし易さ、膜の強度、剥がれ残りについて評価し、さらに肌のしっとり感および肌のなめらかさについても評価した。この結果を表2に示す。

## 【0045】実施例5

被膜形成性化粧料として実施例4と同様の化粧料を使用し、透湿性基材として実施例2と同様の基材を使用する以外は実施例1を繰り返してシート状バック(厚さ280μm)を得、これを評価した。この結果を表2に示

す。

## 【0046】実施例6

実施例4と同様の被膜形成性化粧料を剥離シートに流延し、その上に透湿性基材を重ね、水分量を30~40%とした後、上面をポリプロピレンフィルムで覆い、水分の蒸発を防止した。これにより、図1に示したように透湿性基材が被膜形成性化粧料層の中央部に埋め込まれているシート状バック(厚さ400μm)を得、これを評価した。この結果を表2に示す。

## 【0047】比較例4

実施例4と同様に被膜形成性化粧料溶液を調製し、これを剥離シートに流延し(厚さ約500μm)、70℃の熱風乾燥炉を通して水分量を約30~40%に調整した後、透湿性基材を積層し、さらに70℃の熱風乾燥炉を通して水分量約8~12%に乾燥させた。これにより、図4に示したように、被膜形成性化粧料層と透湿性基材とが、透湿性基材中に被膜形成性化粧料が実質的に含浸することなく積層しているシート状バック(厚さ300μm)を得た。そして、このシート状バックを実施例4

と同様に評価した。この結果を表 2 に示す。

【0048】比較例 5

透湿性基材を使用しない以外は実施例 4 と同様にシート状バックを作製し、これを評価した。この結果を表 2 に示す。

【0049】比較例 6

実施例 4 と同様の被膜形成性化粧品を指で塗布量約 0.01 g/cm<sup>2</sup> で塗布し、この使用感を評価した。この結果を表 2 に示す。

【0050】

【表 2】

被膜形成性化粧料 の配合 (重量%)	実施例			比較例		
	4	5	6	4	5	6
ポリビニルアルコール	8.0	←	←	←	←	←
スクワラン	5.0	←	←	←	←	←
ポリメチルシロキサン油	0.2	←	←	←	←	←
グリセリン	5.0	←	←	←	←	←
エタノール	10.0	←	←	←	←	←
ポリビニルアルコール	5.0	←	←	←	←	←
メチルパラベン	0.1	←	←	←	←	←
香料	微量	←	←	←	←	←
精製水	66.7	←	←	←	←	←
透湿性基材	有	←	←	←	無	無
構造	図 2	図 2	図 1	図 4		
厚さ (μm)	280	280	400	300	220	
剥離シート	片面	片面	両面	片面	片面	無
水分量 (%)	15	15	30~40	15	15	69.7
評価						
使い易さ	◎	◎	◎	◎	△	×
密着性	◎	◎	◎	◎	◎	◎
乾燥性	◎	◎	○	◎	◎	×
緊張感	◎~○	◎~○	◎	◎~○	◎~○	◎
剥がし易さ	◎	◎	◎	△	△	×
膜の強度	◎	◎	◎	△	×	×
剥がれ残り	◎	◎	◎	△	×	×
肌のしっとり感	◎~○	◎~○	◎	○	○	◎
肌のなめらかさ	◎~○	◎~○	◎	○	○	◎

表 1 及び表 2 から、シート状バックに透湿性基材を使用した場合でも、その中に被膜形成性化粧料が実質的に含まれず、単に透湿性基材と被膜形成性化粧料層とが積層している態様（比較例 1、比較例 4）は、本発明の実施例に比して剥がしにくく、剥がれ残りも生じやすいことがわかる。また、透湿性基材を使用しない態様（比較例 2、比較例 5）では、膜強度が不十分となり、一層剥がしにくく、剥がれ残りも生じやすいことがわかる。

【0051】

【発明の効果】本発明によれば、皮膚に被膜形成性化粧料を適用後被膜形成が完了するまでの時間を短縮するこ

とが可能となり、剥離時の剥がれ残りも解消することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】本発明の断面図である。

【図 2】本発明の他の態様の断面図である。

【図 3】本発明の平面形状の態様の説明図である。

【図 4】従来のシート状バックの断面図である。

【符号の説明】

- 1 透湿性基材
- 2 被膜形成性化粧料層

【図 1】



【図 2】



( 8 )

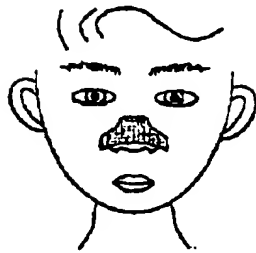
特開平 7 - 3 3 0 5 7 5

【図 3】

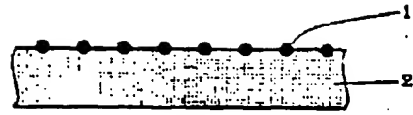
(a)



(b)



【図 4】





フロントページの続き

(72) 発明者 寺部 基子

東京都豊島区南大塚 2 - 6 - 7 メゾン新  
大塚 2 0 1

(72) 発明者 榎橋 昌則

千葉県船橋市印内 3 - 2 0 - 1 花王寮 1  
3 A